アメリカ留学2年半

上岡弘二

アメリカへ来てから2年半，日本から着いたばかりの人に会うと，自分がなんとなくアメリカ的な考え方をしているのに，気付いて驚くことがある。自分など，最後までアメリカ的になるまい，といきまいていた方だと思うのであるが，なんとか当地の大学の fellowship をもらうのに差支えのない成績——full course を取らされて平均Aマイナスまたはそれ以上の成績，これは正直言って大変にきびしい——を得ようと思えば，多少ともアメリカナイズされないではすまなかった，ということであろうか。以下の雑文には，あるいは，ちょっとアメリカへ行ったと思ったら好い気になりやがって，と取られるような所があるかもしれない。しかし，もしそのような節があれば，それはこの2年半（Summer Session をいれれば4つの）こちらの大学で学んでいる過程に，筆者の心にわだかまりとなって来た——筆者に関係ある現在の日本の学界についての——表現しようのない焦燥感が無意識的にあらわれるものと，ひとまず解していただきたいのである。前置きの最後に，筆者は自分で直接に見聞したことを，出来るだけ客観的かつありのままに，述べようとするものであることを申し添えておきたい。

☆　☆　☆　☆　☆

まず筆者が64年9月～66年5月にわたって在学，その Dept. of Oriental Studies に所属していた，フィラデルフィアの Univ. of Pennsylvania（以下ペン大）のことから始めよう。

ペン大は，いわゆる Ivy League の中では存在の目立たない方ではあるが，歴史は極めて古く，1751年ベンジャミン・フランクリンによって創立されたものである。ただし本誌の読者には，中原与茂九郎先生と親しい Samuel N. Kramer のいる大学である，と言った方が通りが好いかもしれない。狭義の東洋史の分野では特筆すべき人材はないようであり，西洋史の方は筆者の判断を越えるので触れないことにするが，Semitic 関係では E. A. Speiser（65年夏死去），S. D. Goitein, Mosche Greenberg など，人類学では *Language in Culture and Society: A Reader in Linguistics and*

Anthropology の編者 Dell Hymes, が著名である。筆者がアメリカへ来てから全く新しく始めた言語学——異なったいくつかの語族の交錯する西南アジアの研究には，言語学の基本的知識は必須のものであろう——の方面では，*Old Persian* の著者 Roland G. Kent (53 年死去) の後を継いだ Henry M. Hoenigswald (著書として，たとえば，言語学関係の人ならつとに御承知の *Language Change and Linguistic Reconstruction*)，アメリカ言語学のかつての大立物 Zellig S. Harris，やがてはアメリカの印欧比較言語学を（特にサンスクリット方面で）代表する一人になること確実な，30才を越したばかりの George Cardona，などを擁して豊富な陣容である。ちなみに，昨年夏に来日した例の Noam Chomsky（その鋭さの故に，Noam ではなく "Gnome" だ，などと言われる）が，最初の著書 *Syntactic Structure* の基本的構想を形成し得たのは，ペン大大学院に在学中 Harris のもとでであった。筆者の専攻のインド・イラン学では，ペン大のみならず米国 Oriental Studies きっての重鎮（今夏ミシガン大学での国際東洋学会では General President）である W. Norman Brown（ただし後述の如く昨年5月退官)，本誌16号に原稿を寄せていただいたイラン学の Mark J. Dresden（オランダ人)，インド美術史の Stella Kramrisch 女史（オーストリア人)，*JAOS* の編集主任として知られる Ernest Bender，など教官多数に上るが，日本人では東大出身の前田専学氏が，ペン大留学に引続き，学位取得以来インド哲学の授業を担当される。

留学当初の印象は一番強烈（このことは 64 年夏，到着早々の5週間を英語の講習に過ごしたニューヨーク州北部の Rochester 大学に，より当てはまるかもしれない)，したがって最初の2年間を送った大学ともなると，やはりペン大に対しては母校意識が働く。Brown, Dresden, Hoenigswald, Goitein といった諸教授は，ペン大流に "Dr. So-and-So" と呼びかけるよりも，日本風に「何某先生」と呼びかけたいくらいで，研究者としても教育者としても強烈な印象を残した方々であった。———いささか前後するが，母校意識の出た所で，ペン大の自慢をもう少しさせてもらうと，ここの University Museum は日本交通公社『外国旅行案内』によれば「世界最大といわれる考古学博物館」(！)，とまで言うにはいささか言葉の彩があるにしても，とにかくエジプト・メソポタミア部門の充実ぶりは見事なものである。かつて朝日新聞社の肝いりで「エジプト展」が大きな話題となったことを想起するが，もしこの University Museum のエジプト関係の 1/3 でも日本へもって行って展示されたら，あれ以上の大騒ぎになること確実であろう。———前後のしついでに，ペン大では，昨年春の悲劇的

な事故（アパートの火事で日本人留学生2名を込め3人の死者が出た）を契機として，「フィラデルフィア日本会」が結成され，見事な活動ぶりを示していることを付記しておきたい。また，歴史学科の Conroy 教授を中心とする毎木曜日の "Japanese Luncheon" は，時に日本文化全般に関する活発な議論の場ともなり，日本人と当地の東洋に関心ある人々との交流を深めている。Conroy 教授夫妻にはいろいろ御厄介になったこととあわせ，これまた筆者がペン大に忘れ難いものの一つである。

さて，以上を長い前置きとして，Brown 先生とその Vedic seminar，および Dresden 先生とその教室(学生は筆者一人のことが多かった)，の印象を述べてみたい。

筆者は Brown 先生について，先生退官前の最後の2年間のセミナーに出るという幸運に恵まれた。いうまでもなく先生は，つとに AOS（アメリカ東洋学会）の会長なども勤められたこの国インド学界の最長老であり，70 才を越された現在も，American Institute of Indian Studies（プーナを中心に1961年設立）の President として，年末から年初にかけてのインド行きを欠かされない。インドから帰国されたその翌朝のセミナーにも，われわれ学生より早く姿を現わされる程のかくしゃくさである。先生は，往々にしてインドそのものを嫌悪しがちな他の西欧インド学者と違って，インドに限りない愛着を持たれ，その学識は単に文献学的な面だけではなく，美術史的な面なども込めて，Vedic から現代インドに及んでいる。しかし先生の最もエンジョイされているように見えたのは，やはり Vedic，特に *Rig Veda*（以下 *RV*）の研究である。先生が最後の年のセミナーで読まれたのは，*RV* 中でも特に難解とされる I 164，いわゆる *asya vāmasya* 讃歌であった。学生は大体6人，それに一・二の教官——コロンビアから母校の教壇に移って来たばかりの Royal Weiler, 先述した若き俊才 Cardona——が加わることも多かった。*RV* の難解な章句には十人十色の異なった解釈が出てもさして不思議ではなく，セミナーは多く学生と先生との，あるいは学生相互間の，ディスカッションという形で進行して，学生間の激しいやりとりを先生が微笑しながら見ておられることも稀でなかったし，また時には珍妙な解釈が出てクラスが爆笑の渦になったりもした。なるほど，この2年間に，先生のセミナーでわれわれの読んだ *RV* の分量は，決して多くはなかった。しかし，そこでは，一行一行・一語一語が，われわれ学生の側に疑問・異論の生ずる限り，parallel あるいは similar passage の検討を通じて見事に解明されて行った。このようにして，*RV* を読む——いや，エンジョイする——とはいかなることであるかを，われわれは Brown 先生から教えられたのである。

先生はまさに *RV* をエンジョイされていたのであり，われわれ学生にもそうすることを希望された。

そして，西欧学者の意見を多く引くことをもって誇りとし，それらの中間を取って結論としがちなわれわれとは正反対に，先生のなにより不快とされたのは，したり顔に他の学者の説を——それがいかに最近のものであろうとも——援用してくることであった。まず自分自身の頭で考える，その結果がすでに前世紀に出された解釈に落ちつこうと，それはそれでよいのである。筆者が先生から受けた最大の教訓は実にこのことであり，それから，いかに困難な文献を扱うにしてもそれをエンジョイすべきであるということ，さらに，良き学者たるべく精一杯の努力をすると共に，良き師たるべくさらにそれ以上の努力を払え，ということであった。われわれは学者を，その学識の偉大さの故に畏敬して当然である。しかし筆者が Brown 先生について最も心を打たれたのは，先生の師としての偉大さであった。偉大な学者に会うのはむしろたやすく，偉大な師に会うのは至難のわざである。この先生は筆者にとって，まさに「ブラウン先生」，と限りない慕わしさを込めて呼びかけるべき人であり，ペン大流に "Dr. Brown" と語りかけるべき人ではなかった。

いささか個人的な感傷に走りすぎたかもしれない。ところで Brown 先生は，学生一人一人の意見を，克明に自己のノートに書きとめるのを常とされた。特に*asya vāmasya* 讃歌を読み終った後での，この讃歌全体についての総括ディスカッションでは，学生一人一人の見解をその名前も入れてノートされていた。恐らく学生のほとんどが，自分の見解が先生のノートにメモされる価値あるものとは，考えていなかったであろう。しかし先生にとっては，学生とは教えるべき存在ではなくして，共に考える同僚，自己と全く対等たるべき研究者，なのであった。先生は，たとえわれわれが準備不足でも，それに対して何一つ文句を言われることはなかった。しかし先生のそのような態度の故に，学生にとっては，Brown 先生はやはりだれにもまして恐ろしい存在であった。われわれにとって先生の恐ろしさとは，その教え方のきびしさの故にではなく，みずから誇ることのない学識の偉大さと，学生に対する先生の思いやりとの故に，われわれが先生に抱く敬愛の念から自然に生まれて来るものであった。66 年 5 月初旬のある日，先生の退官を記念してわれわれ学生がささやかな祝宴を張り，先生にこれまたささやかな贈り物をしたとき，先生は，日本流に言い直せば，教師冥利に尽きる，と一言よろこびを表現された。祝宴の後で，先生が夫人とコルベアを運転して去られるのを見送ったとき，いやにフィラデルフィアの初夏の太陽がまぶしかったのを記憶している。筆者のペン大

に対する母校意識というのも，このような Brown 先生，またつぎに述べる Dresden 先生，に覚える個人的な慕わしさに，実はよる所が大きいのかもしれない。

筆者の一番近かったのは，イラン学の Dresden 先生である。この先生とは，最後の一年間など専攻学生が筆者一人だったこともあって，クラスは多く一対一であった。一対一といっても日本流に対面してやるのではなく，自分の真横へ坐らせて，その太い指で問題箇所を押え押えしながら，根掘り葉掘り質問するやり方である。このやり方では，準備不足だとすぐ暴露してしまう（ノートに書込んでおくだけでは駄目で，記憶しておかないといけない）ので，つらい思いをしながら準備したことも多かった。最初の年に取った Old Persian and Avestan のコースでは，学生がもう一人ありはしたが，文法を教えることなど一切なく，古代ペルシア語といって何をするかも聞いていないのでボヤッと出て行ったら，すぐさま Kent, *Old Persian* 中のテクストを眼の前に突き出され，訳させられたのには少なからずびっくりした。そして，その時の assignment は，Kent の本の文法部分を全部きちんと読んで，次週の箇所を準備してくるように，とのことであった。———アメリカではこのような仕方が一般で，文法から丁寧に教えたりはしないようである。後に述べる Winter のトカラ語のコースでも，すぐにテクストを読み始めて，あの混沌の見本のような Thomas=Krause, *Elementarbuch* I の Grammatik 部分は，第一週の終りあたりまでに各自が読み了えることを要求された。ハーバードの初級ペルシア語のクラスでも，Lampton の文法は各自が家で見るものとし，文字と be 動詞にあたるものとを教えた最初の一時間を除き，すぐさまテクストに移って，3月もしない内にサーディーを手写本で読まされた（もっとも，正直言って，これは読めたものではない）。ずいぶん手荒い話だが，読めと言われたら必ず読まないと脱落する。これがアメリカ流というものなのであろう。

アメリカ流について，余談を続けさせていただきたい。日本育英会のように，充分とは遠い金額をくれてアルバイトに精を出させ，その上に後で返済の義務を負わせるといったケチな仕方を，さすが金持の国たる所以か，アメリカの大学 fellowship はとらない。が，その代りに，勉学だけには充分な金額をくれて，四六時中ひたすら勉強することを要求するのである。コースの assignments がとても出来たものでないと思われても，泣きながらでもやる以外に手はない。事実コースによっては，よしや全頁を読まされるわけではないにしても，1 semester の間に 100 冊近い reading assignments という例さえある。一口に 100 冊といっても，それらは小説ではなく学術書であって，

要点は当然に記憶することを要求される。もし，とても読めないと放ってしまったら，では，もう来年は fellowship を差上げませんからどうぞお引取りを，というシステムなのである。成績さえ良ければ，何国人であろうと気前よく金をくれる——筆者は2年間，貧乏私立のペン大から，年額 1850 ドルの free tuition と 2000 ドルの fellowship とをもらっていた——，この点は実にはっきりしている。悪く言えば非人間的で，およそ人情の入る余地はない。アメリカの大学はきびしい，と痛感する次第である。

こんな風に書いてくると，筆者がいかにも英語にも強く，成績も至って良く出来た，かのような印象を与えそうであるが，実はそれどころか，2年半たった今から考えると，赤面することが二つや三つではない。たとえば Dresden 先生についても，二年目の半ば頃には人生論まで戦わせる間柄になったけれども，最初の半年くらいは全くひどいもので，筆者が例によって英語を口ごもっていると，先生の方から見るに見兼ねて，"What you want to say is…?" などと先きにこちらの言いたいことを言って下さり，こちらはただ "That's right." とか "Yes, that's what I want to say." などばかりの内に，2時間のクラスが終ったりしたこともあった。英語のなってなかった次第をさらに白状に及ぶならば——この点ハーバードでは，日本人は頭のよい者ほど，また国立大学出（ことに京大出？）ほど，英語は下手であるという，未だもって証明はされていない有難い仮説があるのだが——，ペン大在学半年の頃，大和男子の勇を鼓して金髪嬢にデイトを申込み，承知してくれたのはよかったものの，彼女が美人すぎたせいか当日すっかり上ってしまい，しどろもどろならまだしも，英語などてんで出て来ない始末だった。さらに半年たった後日，今だから言うがと前置きして彼女の語った所によると，あのときあなたの言ったことは全く何もわからなかった，正直言って少しおかしいのじゃないかしらと思った，とのことである。余りにお粗末なチンピラ的エピソードで，今日ただただ赤面の外はない。

脱線がむやみに長びいたが，Dresden 先生の思い出に戻ると，先生の自宅には何回となく遊びに行って，いつぞやは，イアン・フレミングの「007 シリーズ」中のベストワンは何か，といったことで Dresden 夫人も入れての大論争（？）をしたことさえある。先生から受けた個人的感銘は，Brown 先生からのそれと多分に二重写しになっているので，ここでは詳細を述べまい。ただ，学者としての Dresden 先生の一番強い印象として残るのは，往々にしてわれわれにありがちな，不充分な資料に基づいてdenkenしようとするやり方を，徹底的に排されたことである。先生が口癖に発せられた

"Nobody knows." という言葉は，先生がわれわれの意味で知らないのではなくて，知りすぎているが故にの "Nobody knows." であり，文献学者として，いわゆる denken——denken は常に極めて魅惑的である——に走ることを戒められるのであった。

☆　☆　☆　☆　☆

65 年の夏，筆者は American Council of Learned Societies の scholarship を得て，ミシガン大学での Linguistic Institute (Summer Session in Linguistics の開催母体，したがって所在は夏ごとに変る）に在籍，あわせてアメリカ言語学会夏季大会に出席，の機会を与えられた。その頃の模様を以下に述べる。

すでに書いたように，アメリカの大学は一般に日本の大学よりきびしいが，全国規模で組織された Summer Session は特にそうである。とりわけ言語学のそれは，アメリカ全土から関係学生の最優秀者を集めて猛烈を極め，尾籠な話だが，排泄の暇にまで勉強させられたと言って，過言ではなく，しかもこれは，筆者のようなボンヤリ者の外国人学生，に限ってのことでもなさそうであった。正規 1 semester の分量を試験期間も込めて 8 週間であげようとして，各コース毎日 1 時間ずつクラスがあり，その外さらに週 2〜3 回の forum lecture があった。ここでは，Introduction to linguistics を担当された Gleason（改訂版にしてもやや古くなった感はあるが，名著 *Introduction to Descriptive Linguistics* の著者）の，つぼを押えたコースはやはり見事であったと思う。また，Sol Saporta (*Psycholinguistics : A Book of Readings* の編者）の，独特な風格のあるクラスも忘れ難い。しかし何よりも，（ライデン大学から来講された）F. B. J. Kuiper 先生のアヴェスターは全く印象的であった。先生が，北国ミシガンの青い空を窓越しに見上げながら，*Yasna* 30 を一語一語，自信をもってしかも実に謙虚に講義されるとき，偉大な学者に対するのはなんと心身ともに疲れるものであるか，などと思ったりした。Kuiper 先生は，筆者にとって，恐らく生涯忘れることの出来ない方である。先生が，ヨーロッパに数少ない早くからの laryngealist でありながら，laryngeal theory を使って語形を説明されるときの一瞬照れたような表情など，今でもはっきり眼に浮かぶ。

☆　☆　☆　☆　☆

このとき出席したアメリカ言語学会については，66年 4 月にフィラデルフィアで行なわれたアメリカ東洋学会の様子と，便宜上ここに一括して記すこととしよう。どちらの学会でも，15分間ペーパーが読まれるという点では，日本の学会（たとえば印度学仏教

学会）と同じことである。違いといえば，まず，日本では大家連は大体後方に鎮座ましまして，何が発表されても万事すべてのみこんでいるが如き堂々の貫録を保持されるのに反し，アメリカでは，動きの激しい言語学会の場合には特に，大先生が最前列近くに陣取り，痛烈な皮肉をとばしたり，往々はしたなくも禿頭から湯気を立てるまでして，発表者そっちのけに大先生同士が，呆れるくらい派手な口論を繰り広げることである。Linguistic Institute の forum lecture ではさらに著しく，昨年夏の（後述する如くロサンゼルスであった）それに到っては，伝統的 descriptive grammar 派と，Chomsky および Stockwell を中心とする generative grammar 派と，そしてLamb（学会前後は Gleason を込め）に代表される新興 stratificational grammar 派——加えてこの年の Institute には，tagmemic theory の Langacre が相当の期間，ロンドン学派の Michael A. K. Halliday が全期間，出講していた——，これら各派間の熱気のこもった論争は，傍観者の筆者にも，アメリカ言語学の潮流の激しさを，なぜか耐え難い焦燥感とともに，しみじみ肝銘させるものがあった。それから，たとえ素晴しいペーパーでも発表者が若輩ならまばらな拍手，たとえ平凡なペーパーでも大家となれば拍手しばしば鳴りやまず，といった風な日本的美徳の発揮されるのを，この国の学会では見たことがない。事実，アメリカ東洋学会では，エールの Isidore Dyen のような大物が，鋭い質問に会って立往生させられる場面があった。

かといって，その雰囲気が，決して固苦しいわけではないのである。65年夏のアメリカ言語学会では，買物篭をさげたような小母さんが聴衆の中にいて，インド学関係の長老の一人 Murray B. Emeneau 先生（カリフォルニア大，バークレー）がドラヴィダ語の民謡に残る古語形について発表されたとき，小母さん俄然質問に及んで，そのフォークソングはダンスの際に用いられると今しがた言われましたが，それはどのようなダンスでしょうか，と聞くのであった。すると Emeneau 先生，私はもう年を取ったので旨く真似は出来ないがと断わってから，「ホッ！ホッ！」と掛声よろしく両手を差し上げて壇上を一踊りし，聴衆は一斉に大拍手，Emeneau 先生しきりに照れ笑いされていた。果して日本の高名な碩学に，買物篭の小母さんのこういった場違いな質問にも，かく見事に応ずるだけの器量があるかどうか，その折のわれわれ仲間は論じ合ったものである。発表時間の割当てにしても，早朝の発表は若手，中頃は中堅クラス，締括りは当り障りのない大家のペーパーで，などという日本的な seniority はなく，ここでは申込みの順に決まるものと見えて，ゴールデン・アワーをチンピラ多数がほとんど独占，最終日の最後の発表が一介の大学院学生のペーパーであったりした。

ついでに，上記アメリカ東洋学会に引続いて，筆者在学中のペン大で，66年4月に開催された Indo-European Conference の模様をお伝えする。これは，すでに完成された印欧比較言語学者の，パネル・ディスカッションである。この Conference には，ポーランドから Kurylowicz（当時ハーバードに来講），それにパリから（主催者側 Hoenigswald 教授から特別の懇請があって，アメリカ嫌いの）Benveniste と，斯界の両大御所を初めとする25名以上の著名学者が来集し，早朝から夕暮に到るまで，わずか昼食の一時間を除き一切休息なしに，3日間それぞれ大部なペーパーを読み，熱気がムンムンするような応酬を展開した。アメリカでやれる勉強なら原則的には日本ででも出来るはず，各自の学問はつまる所，特定の教授による指導とは関係なしに，各自の取扱う原典および関係書との戦いから生まれるべきものである。しかし，そうとは知りながらも，一流学者が一堂に会しての白熱した論戦がかもし出す雰囲気は，筆者には極度に刺戟的で，羨望を禁じ得ぬものに思われた。この Conference に代表されるような，こちら（アメリカだけでなく，実質的にヨーロッパ諸国をも込めて）の研究者間にある交流の密接さは，その圏外に立ってなお孤高の偉大を実現し得る可能性への懐疑を誘い，われわれを苛立たせるのに充分だったのである。

しかし，苛立ち慌てても仕方がない。そこは日本人的楽観主義で，今の事態がその内には改善されて行くことを確信しつつ，この会期中のエピソードを一つ御紹介する。Benveniste がペーパーを読んだとき，カリフォルニア大（ロサンゼルス）の Maria Gimbutas が，私は言語学者ではないのでと前置きして，個々の語について細々したことを質問した。そこで座長の Hoenigswald が，時間の制限をも気にかけてか，"I'm afraid you are asking too much." とか言った所，やや下手より Kurylowicz が，すかさず "But she is a woman!" とやって，それまでムンムンしていた会場が大笑いになった。筆者に身近な傍聴者間には——もしこれもまた挿話というならば——，「世の中には偉い奴が少しばかり多すぎる，俺はもう印欧語をやる気がなくなった」と，同じ Hoenigswald 先生のクラスに出ていた言語学専攻の友人の述懐があった。アメリカ人学生にさえこの言ありでは，やはり先刻の感想へ引き戻されてしまう。苛烈な闘技場を度外視して無邪気な一生を過ごすか，気付いた自己の弱小に対処しようと必死になるか，道はこの二つしかない。それ以外の道は，われわれ研究者たらんとする者にとって，余りにも悲惨すぎるであろう。

昨年6月～8月には，再び幸運にも American Council of Learned Societies から scholarship を恵まれて，その節約分で大陸横断バス旅行まる4週間を楽しみながら，UCLA (University of California, Los Angeles) での Linguistic Institute に参加することが出来た。旅行の途中では，（他所者にどちらかといえば冷淡な東部大都市の人々と違って）大西部の小さな村々の住民の人なつっこさ，グランド・キャニオンのなんとも形容出来ぬ馬鹿でかさ，アリゾナ平原の心のしんまで赤くするような夕焼など，様々なものを見物させてもらった。

Institute そのもので印象に残るのは——ロマンチストで懇切丁寧だった Manfred Mayrhofer 先生(ザール大学から来講，ただし直後ウィーンに転じ Kretschmer の後継者となる)，Indo-Aryan linguistics，この題目で現在望み得る最高の講義だったと思う；——茶目っ気十分なくせに切れ味のすごいキール大学の Werner Winter 先生（当時テクサス大，現在エール，を兼任），Tocharian，教えることそのものよりも Thomas=Krause 批判に終始した；——Daniel Jones の愛弟子で実に鮮かな教え方だった Peter Ladgefoged 先生，音声学，直々に cardinal vowels などを見ていただいた。こういったクラス自体にもまさって有意義，とさえ感じられることもあったのは（すでに触れた）週3回の forum lecture，そして学生仲間での気のおけない言語学論議，であった。定まった指導教授とてなく，教師も学生も全米および欧州からの寄せ集めであるこの Institute では，学生は教師に対して特に辛辣となる。教える側が不熱心か無能ならば，たちまち学生は逃げ去り，学生を繋ぎとめることの出来るのは，各教授の学識そのものプラス教える努力，のみなのである。その上に，各教授は，自己のクラスの聴講者中に，同僚の顔を見出だすことを覚悟していなければならない。たとえば，Winter のトカラ語には，Mayrhofer と Adelaide Hahn 老女史（ニューヨーク市大，西洋古典の人だがヒッタイトなどもやり，かぶっている帽子と多少ともの奇行とに有名）が出席して，いろいろと質問を放つ。また別な形では，Winter の Indo-European seminar における問題点をひっさげ，その聴講学生が Mayrhofer の Indo-Aryan linguistics クラスにやって来て質問，そこで Mayrhofer が答えて Winter 説への不同意を表明，といった事態がおこる。われわれ学生にとって実にきびしいこの Institute は，教える方にとって，それ以上にきびしいものであったかもしれない。——アメリカ流の平等主義で，筆者の寄宿したのは Mayrhofer 先生とも Winter 先生とも同じ寮（最新の7階建の豪華なものだった）で，毎日食事時には必ず顔を合わせていた。赤・黄・紫など色とりどりの花咲き乱れる構内を，夕日を浴びて Mayrhofer

先生と散歩したときなど，筆者が人並みにロマンチックな感激にひたったのは，UCLAの夏の宵の余りな美景の故かもしれぬが，いずれにしても楽しい思い出となっている。

☆　☆　☆　☆　☆

筆者は昨年9月からハーバードに移ったが，こちらのことはまだ日も浅い上に，紙数も尽きたので省略したい。（そもそもハーバードの模様を書くことでは，近く学位を取得して4年間の留学を完結，トロント大学に赴任予定の小林信彦先輩こそ適任者であろう。）その他，この国の大学の制度などに接して考えたことも書いてみたい気がするが，これも今回は省略する。

最後に，八方からのお叱りを覚悟の上で言わせていただくならば，一家をなした先生が visiting scholar などの資格で留学なさるのは，もう一つ意味のないことが多い，ということであろう。言葉のハンディキャップそのものよりも，抜き難い先入見と，無意識に働く自尊心擁護との故に，こちらの学者の言うことをまともに理解しようともしない（乃至は，理解出来ない）で，アメリカの学問は駄目だと決めてかかれる幸福な大先生，あるいは全く逆に，とても駄目だと手をあげて，visiting scholarship の一年間を飲んでばかり（ここではジョニグロも大して高くない）の良心派大先生，等々。これは筆者のたわごとではなく，ハーバード周辺で頻々たるまでの事実である。かくて当地に残された数々の逸話を直接・間接に見聞するとき，われわれ仲間の感嘆はいつも，さすが大先生ともなると善悪の事績までが，われらチンピラ輩の小善小悪とは桁ちがいに大きくて，われらにはとうてい及び難いという所に帰一する。われわれ仲間が，心して大先生にならぬよう努めている所以である。

アメリカの一流大学は，その専攻のいかんを問わず，真摯に学ぶべきものを充分提供し得るものと確信する。純東洋史関係の方々にはどれくらい共感していただけるか疑問だが，筆者の過去2年半の印象を一言でつくすならば，世の中にはとてつもなく偉い奴が多い，ということなのである。末尾に，本稿の読者が筆者ともし同じ体験を持たれたならば，恐らくもっときびしいことを書かないではおれなかったであろう，という補足つきで数々の暴言へのお許しを願っておきたい。

（1967 年2月 19 日記）